

かくすればかくなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂

親思ふころにまさる親ごころけふの音づれ何ときくらむ

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂

呼びだしの聲まつ外に今の世に待つべき事のなかりけるかな

吉田松陰は、幕末の思想家、教育者。長州(山口県)毛利藩の兵学師範である叔父の養子となり、幼少より学問に励み、藩主毛利敬親からも囑望された。安政元年(一八五四)、海外事情探索を志し、鎖国の禁を破って、再来したペリーの黒船に密航を企てたが失敗して自首(いわゆる下田踏海事件)。萩の野山獄に入り、のち実家である杉家に幽囚。ここに松下村塾を開き、久坂玄瑞、高杉晋作等多くの志士を育てた。安政五年、日米通商条約の違勅調印に憤激し、運動を展開せんとしたが野山獄に再入獄。翌年、安政大獄で江戸に東送され、刑死。

一首目は下田踏海のと、囚人となり江戸に送られたとき、高輪の泉岳寺の前を過ぎ赤穂義士を追想して詠んだもの。「海外渡航が大罪であることは充分承知している。しかし、国家危急の今、『已むに已まれぬ大和魂』が自分を突き動かしたのである」の意。内なる魂の叫びに従って大義をなそうとした点では、四十七士も自分も同じであるという思いを詠んだ歌で、「悲劇的な運命を予知しつつも、鬱勃たる思いを抑えがたい、その切迫した心が自然に韻律を生み出したようにカ音やヤ音のリズムがくりかえされ、力強い調子になって」(短歌のすすめ)所載、山田輝彦「幕末志士の歌」に引く。

二首目は松陰の家庭生活を偲ばせる歌である。安政六年(一八五九)、江戸の獄中にいよいよ死刑は免れぬと知って、萩の父、叔父、兄宛てに「永訣(ながの別れ)の書」をつくる。冒頭には「平生の学問浅薄にして至誠天地を感格する(天地を感動せしめ、ゆり動かす)こと出来申さず、非常の変(死刑に処せられる)に立ち至り申し候。嗚々御愁傷(お嘆き)も遊ばさるべく拝察(つかまつ)仕り候」と記し、ついでこの歌を記している。「子が親を思う以上に親の子を思う心は深い。自分を今まで深く慈しんでくださった父母は、刑死の報せをどのようにお聞きになることか」の意。深い悲しみの中にありながら、その悲しみにおぼれぬ松陰の精神の強さをうかがわせる歌である。さらに、松陰は処刑日(十月二十七日)直前の二十五日未明から二十六日にかけて門人、同志たちに宛てた遺書「留魂録」を書く。その冒頭に記したのが三首目の歌。処刑された自分の身体が土に帰ることになったとしても、この大和魂だけはこの世に留めたいという志士松陰の絶唱である。歌自体が「留魂録」という名の由縁を示している。松陰は「留魂録」に遺した言葉とともにその魂をこの世に留めたのである。

四首目は「留魂録」のあとに記された連作の五首「かきつけ終りて後」のうちの一。一首。「思うことをこの『留魂録』に記し終えた今、処刑の呼び出しを待つばかりに待つことはない」の意。その心境は想像を絶するが、歌はじつに静かな響きをたたえており、松陰の「平生の学問」の力を思わしめられる。享年三十。

ほととぎす血になく聲は有明の月よりほかに聞く人ぞなき

けふもまた知られぬ露のいのちもて千歳を照らす月を見るかな

ふるさとの花さへ見ずに豊浦の新防人とわれは来にけり

久坂玄瑞は長州藩士。高杉晋作(本書171頁参照)とならぶ松下村塾の双壁といわれる。母、父、兄を相次いでなくし、十五歳で天涯孤獨の身となる。松陰は玄瑞を深く愛し、末妹を玄瑞に妻あわせた。松陰の死後も高杉晋作らと藩を超えた尊皇攘夷派の中心的人物として活躍。元治元年(一八六四)、蛤御門の変(長州藩が自らに着せられた冤罪をそぐために出兵、皇居の蛤御門の前で戦い敗れた事件)で流弾に当たり、自決。享年二十五。

最初の二首は、文久元年(一八六一)、江戸遊学中の歌。すでに玄瑞は水戸・薩摩などの藩士と往来して国事を談じ、和宮降嫁(本書178頁参照)を阻止すべく運動を展開しようとしていた頃である。

一首目は「郭公」の題がある。自らをほととぎすに擬え、「血になく聲」自分の必死の声も「有明の月」残月より他に誰も聞くものはない、の意。「千載集」の「ほととぎす鳴きつるかたをながむればただありあけの月ぞのこれる」(藤原実定)を踏まえているのだろうが、本歌とは隔絶した悲痛な心情が詠まれている。

二首目は、国事に奔走して「けふもまた知られぬ露のいのち」今日明日の命さえ知られぬ緊張感を背景に、悠久の月の光を仰ぐ心情を生き活きと伝えている。玄瑞は江月齋という号を用いた。

が、この二首からも月を愛した武人の姿が偲ばれる。文久三年四月、玄瑞は將軍家茂が攘夷の期限を五月十日と奉答したのをうけて京都からただちに下関に下り、光明寺党(のちの奇兵隊の起源)を結成し、英、仏、蘭、米の艦隊への砲撃に参加した。

三首目は下関に帰る途次、周防の富海から故郷の妻に送った手紙の中に記した歌。「豊浦」は遠い古、第十四代・仲哀天皇が九州熊襲征討のため飯宮を置かれたときの下関・長府の古名。「ふるさとの花」とは「いとしい妻」を心においた表現かと思われる。ふるさとの花や妻を思う心も、攘夷の戦いに出る丈夫の心も、ともに玄瑞の心に息づいている。「万葉集」防人の古歌の心を受け継ぎつつも、清新な印象の歌である。